

# 実践レポート 探究の窓

VOL.8

本格実施から丸3年が経った「総合的な探究の時間」。  
現場で試行錯誤が続くなか、  
実践のヒントとなる探究の事例をご紹介します。

## ● 年間スケジュール

### 探究の手法を学び、 自己の興味・関心を深める

1年

「探究の進め方を理解するとともに、自己の興味・関心に立脚し、自ら探究したいと思う問いを発見する」という学年目標の下、「自分」を軸にテーマを設定。前期に1回、後期に1回、探究のサイクルを回す。

### 自分の興味・関心と社会課題 との接点を見だし探究する

2年

「自己の興味・関心と社会課題との関連を考察し、より広く実践的な探究へと問いを展開する」という学年目標の下、「社会」を軸に、自分の興味・関心と社会課題との接点を見だし、外部と連携しながら探究する。

### 探究の取組を振り返り、 進路や大学での学びにつなげる

3年

「自己の進路とこれまでの探究の関連を考察し、より深く理論的な探究へと問いを昇華する」という学年目標の下、専門家のフィードバックを得ながら、探究の振り返りと大学での学びをまとめた「まなびのデザイン」を作成する。

### School Data

1880年創立／普通科・理数科／  
生徒数856人(男子453人・女子  
403人)／進路状況(2025年3月  
卒業)大学197人、そのほか77人

## 盛岡第一高校(岩手・県立)

# 「自分・社会・教科」の 3つの軸で実践的に探究し、 自らの学びをデザインする

### 外部機関と連携・協働し、 地元を思い支える志を育む

盛岡第一高校では、2015年度より指定されたSGH(スーパーグローバルハイスクール)で培った素地を活かし、「地球規模の視野で物事を考えつつ、地域視点で行動するグローバル(Global)人材の育成」を目標



写真左から、まなびデザイン課の齋藤信太郎先生、課長の佐藤幸久先生、千葉慶多先生、坂下祐祐先生。

に掲げた探究学習「M探」<sup>\*</sup>に取り組んでいる。まなびデザイン課 課長の佐藤幸久先生は、SGHからの継承について、次のように語る。

「グローバルな視点をもちつつ、より地に足のついた課題研究をやりたいと考えているようになりました。SGHを通じて行政や地域の企業、団体など外部機関との関係性が構築できてきたこともあり、これを活かして地域課題の解決に取り組もうと、2020年度にM探をスタートさせました」

M探の特徴の一つが、外部機関との連携・協働だ。「当初は生徒の探究学習の支援者だったが、一緒に何かをやらうという協働者になっている」と佐藤先生。互いにWin-Winの関係ができていくという。

「本校の生徒の多くは、卒業すると地元を離れます。高校時代に、地域で頑張っている熱い大人と出会うことや、地域の課題に取り組む経験は、たとえ離れていても地元のことを考える姿勢や地元を支えようという思いにつながるはず。地域の方々も同じ思いで支援をしてくれるので、資金的

な観点でも持続可能な取組が可能になっています」(佐藤先生)

現在は、盛岡市のほか、産学官連携体の「TOLIC(東北ライフサイエンス・インストルメンツ・クラスター)」、岩手大学をはじめとした大学・研究機関などさまざまな組織と連携。外部講師として授業を担当してもらったり、TOLICの助成金(エフミッド)を得た生徒が空き家活用や学校資源循環のプロジェクトに取り組んだり、各所で動きが広がっている。

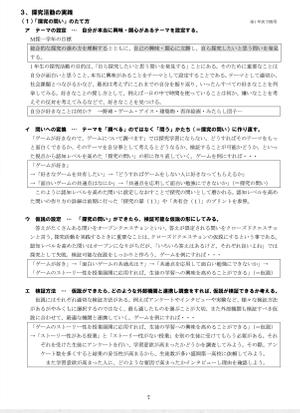
### 3年間を通じた目標と各学年の 目標を設定し、ゴールを明確化

M探が始動して3年目の2022年度に同校に赴任した齋藤信太郎先生は、「取組が学年単位で完結していて、3年間を見通した生徒の成長ビジョンが描けていないと感じた」と当時の課題について振り返る。そこで、3年間を通じた目標と各学年の目標を再設定。最終的にどのようなゴールに結びつくのかを明確にした。

M探の全体目標としては、①課題設定能力、②課題探究能力、③論理的思考力、④プレゼンテーション能力、⑤実践力を育てることとし、これを段階的に身につけるべく、学校の教育目標とも照らしつつ、各学年の目標を設定した。

「1年次は、探究の方法論を学びつつ、自分の興味・関心に立脚した問いを見つける。2年次は、自分の興味・関心と社会課題の関連を考察し、問いを立てて実践してみる。3年次は、これまでの探究を基に、どのような学問的知見が必要かを考察し、自分の

\*「M探」という名称は、同校のシンボルマークであるMと「学び」の頭文字Mを掛けつけられた。



1・2年次に配布する「探究活動の手引き」。探究活動の目的や計画から、問いの立て方、先行研究、調査方法、外部機関との連携、社会問題との接続などの実践方法まで、詳細にまとめられている。



左上：TOLICの参加企業や専門家と生徒がチームを組んで探究活動を行う「HRlwate」の発表の様子。「学校資源の循環化：学校給食の残食をどう考えるか」など複数のプロジェクトが進行中。左下：仲間とアイデアを出し合いながらM探に取り組む生徒たち。右上：ゼミの担当教員との対話を通して、生徒たちは探究の目的や視点を深めていく。右下：地元企業と生徒が企業の課題解決に取り組む「青の問いプロジェクト」の活動を報告するポスターセッションの様子。



3年間の大きな流れは、次の通り。1年次は、探究の手法について学びつつ、前期に1回ずつ探究のサイクルを回す。2年次は、探究のテーマごとに経済、医療、健康、芸術、地域教育、環境、国際など10あまり

探究を振り返り未来を描く「まなびのデザイン」を作成  
「1年次には自分の興味・関心を探り、2年次には社会とつながる。そして、3年次には、探究を通して自分に足りない知見に気づくことで、それを補うための教科学習という視点が芽生える。M探の3年間では、こうした流れを想定しています。本校のような進学校の生徒にありがちなが、自分と教科を結びつけた、学校の中だけで完結した探究。しかし、社会軸が抜けると探究としてのインパクトに欠けてしまいます。外部と連携した実践的なプロジェクト学習により得られる知見は大きく、社会的な実践に取り組む生徒がさらに増えることを期待しています」(斎藤先生)

大学での学びをデザインする。肝になるのは、生徒自身の興味・関心に立脚した問いを、いかに社会課題に結びつけるか。社会課題ありきでは興味がもてず探究は深まりませんし、自分の興味・関心だけだと「ゴールがありません。接点を見つけれられると、探究はグッと質の高いものになります」(斎藤先生) 斎藤先生らは、大正大学の故・浦崎太郎教授が提唱した「自分・社会・教科」の3つの軸からなる探究学習のあり方から学び、1年次は自分、2年次は社会、3年次は教科を軸に据えた。

「1年次には自分の興味・関心を探り、2年次には社会とつながる。そして、3年次には、探究を通して自分に足りない知見に気づくことで、それを補うための教科学習という視点が芽生える。M探の3年間では、こうした流れを想定しています。本校のような進学校の生徒にありがちなが、自分と教科を結びつけた、学校の中だけで完結した探究。しかし、社会軸が抜けると探究としてのインパクトに欠けてしまいます。外部と連携した実践的なプロジェクト学習により得られる知見は大きく、社会的な実践に取り組む生徒がさらに増えることを期待しています」(斎藤先生)

「生徒は選考段階から探究テーマや現地で行いたいことを考案し、事前学習では現地のコーディネーターやメンターの協力を得て準備をします。そして、現地滞在中には、施設の視察に訪れたり、地域や行政の人、大学の先生などにインタビューをしたりと、フィールドワークを実践します。生徒に

また、グローバルなテーマや視点に関心のある生徒は、海外でのフィールドワークにも挑戦できる。同校では毎春、盛岡市の姉妹都市であるカナダ・ヴィクトリア州への海外派遣研修プログラム「白壁の翼」を実施。かつては語学研修の要素が強かったが、M探の始動を機に探究を軸にした内容にシフトした。千葉慶多先生は次のように話す。

「M探はスタートして6年目を迎え、「生徒の意欲の高まりを感じる」と坂下祐治先生。M探の取組を知ったうえで入学する生徒も増え、「生徒にも教員にも浸透してきた」と言う。

「先輩たちのM探の取組を見て、自分たちもやってみたいと感化され、動こうとする姿勢が見られます。職員室でのM探についての会話も「何をどうしたらいいの?」から「(より)良くするためにどうしようか?」に変わってきました」(坂下先生)

「問題・課題の設定が甘い、仮説はあるがそれを十分に検証できていないなど、言いっぱなし、やりっぱなしの生徒が一定数いることは事実であり、今後の課題です。私たち教員も、生徒に問いかけ生徒と対話を重ねながら伴走するあり方を、より徹底していく必要があると感じています」(佐藤先生) 最後に千葉先生は、「私たち教員も、M探のあり方を探究している。自分たちの取組を振り返り、より良いものにしていきたい」と締め括った。

「問題・課題の設定が甘い、仮説はあるがそれを十分に検証できていないなど、言いっぱなし、やりっぱなしの生徒が一定数いることは事実であり、今後の課題です。私たち教員も、生徒に問いかけ生徒と対話を重ねながら伴走するあり方を、より徹底していく必要があると感じています」(佐藤先生) 最後に千葉先生は、「私たち教員も、M探のあり方を探究している。自分たちの取組を振り返り、より良いものにしていきたい」と締め括った。

「先輩たちのM探の取組を見て、自分たちもやってみたいと感化され、動こうとする姿勢が見られます。職員室でのM探についての会話も「何をどうしたらいいの?」から「(より)良くするためにどうしようか?」に変わってきました」(坂下先生)

「先輩たちのM探の取組を見て、自分たちもやってみたいと感化され、動こうとする姿勢が見られます。職員室でのM探についての会話も「何をどうしたらいいの?」から「(より)良くするためにどうしようか?」に変わってきました」(坂下先生)

## まとめ

### 盛岡第一高校の探究のモットー

自分の興味・関心を起点に社会課題との接点を見つけ、実践的に探究する

#自分軸 #社会軸 #教科軸 #外部連携

#### 自分の興味・関心を起点に問いを立てる

1年次には、社会課題ありきではなく、自分の興味・関心を起点に問いを立てる。2年次には、自分の興味・関心と社会課題の接点を見つけ、そこにどのような問いが立てられるかを模索する。

#### 既存のデータではなく「一次情報」を集める

情報収集のステージでは、自ら実践したこと、自ら調査したデータなどの「一次情報」を集める。また、「質的調査」と「量的調査」の両方をクロスさせる調査方法の採用を推奨している。

### 課題の設定

### 情報の収集

### まとめ・表現

### 整理・分析

#### 発表後、英文要約つきの探究論文としてまとめる

中間発表を経て、学年末にはゼミ・クラス発表会、学年発表会、全体発表会を実施。最後は1年次は「報告書」2年次は「探究論文」としてまとめ、英語で要旨をまとめたアブストラクトをつけて提出する。

#### データの質と量を意識し、データの背景にも考慮する

アンケートやインタビューを通して得た回答やデータを整理・分析する手法を学び、実践する。その際には、どのような層を対象にした調査でどのような人が回答しているのかといったことにも配慮する。

#### 探究設計のPOINT

POINT ① 3年間を見通し、生徒の成長が描けるカリキュラムにする

POINT ② 行政、企業、大学など地域の外部機関と連携する

POINT ③ 生徒が自らの学びをデザインする力を育む

#### 評価基準

生徒がお互いの発表に評価をつけ合う際の基準として、M探を通して育てたい5つの力(本文参照)と総合評価についてルーブリックを作成。教員にとっては何を指導すべきか、生徒にとってはどのような意識で探究に取り組むべきかを理解するための視点・基準となっている。

	極めて良好である 3点	概ね良好である 2点	改善の余地がある 1点
課題設定能力	「自分軸」があり、自己の興味・関心に沿った具体的な「探究の問い」であり、独自性や先進性がある。	自己の興味・関心に沿った「探究の問い」である。	「探究の問い」が漠然としている。

※画像は一部抜粋。40ページの「探究活動の手引き」内23ページに全面掲載あり(要ダウンロード)。